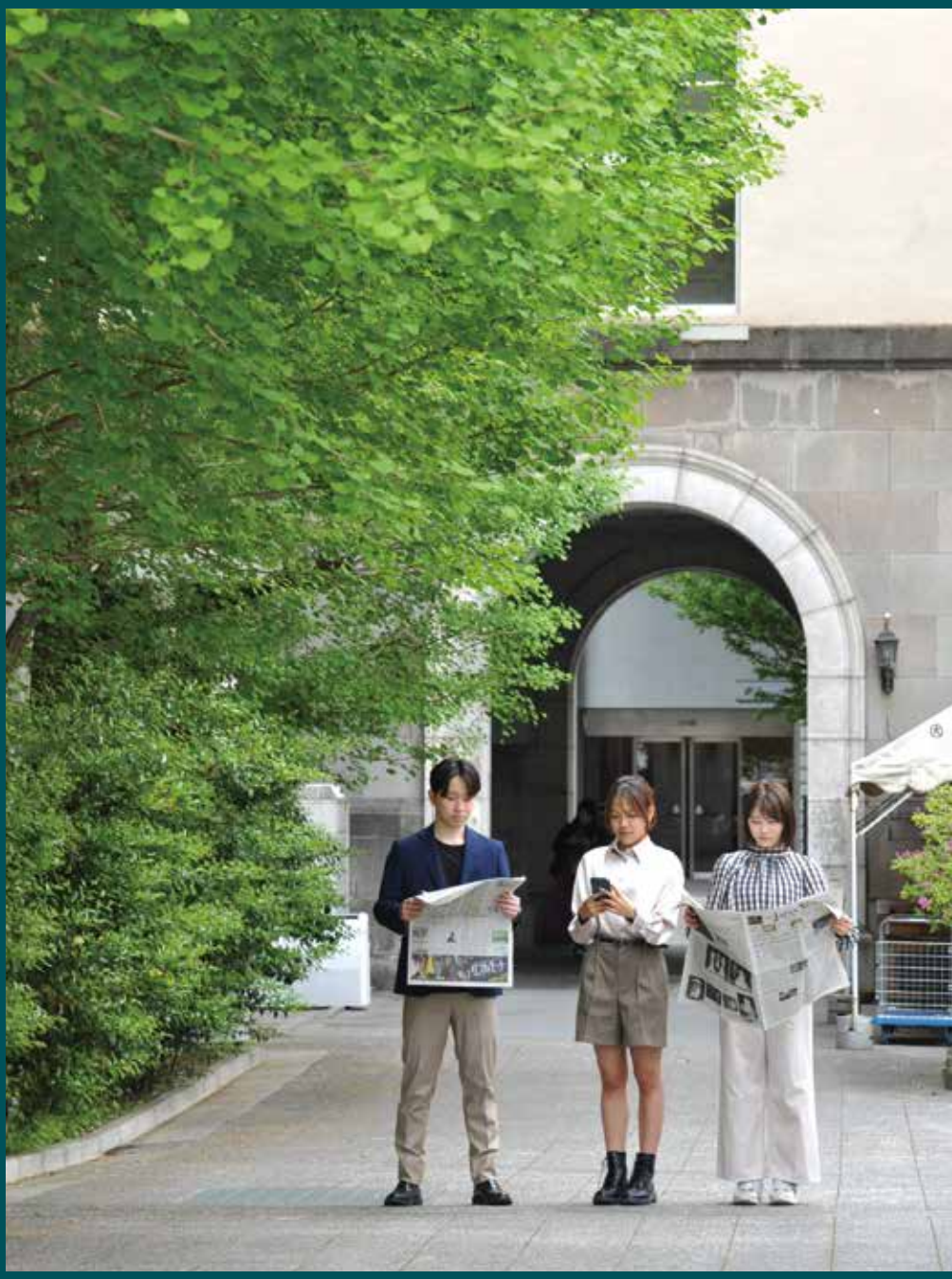
Waseda University × Yomiuri Shimbun

Professionals Workshop 2023

What's News Literacy? 2023

早稲田大学×読売新聞　プロフェッショナルズ・ワークショップ



早稲田大学×読売新聞

プロフェッショナルズ・ワークショップ

早稲田大学と読売新聞社による課外教育プログラム「プロフェッショナルズ・ワークショップ（プロプロ）」は2023年度、「高校生にニュース・リテラシーを伝えるには？」のテーマで学生に議論してもらった。参加した学生15人は3グループに分かれてアイデアを出し合い、2か月後の最終報告会でそれぞれの提言を発表した。週に一度、東京・西早稲田の早稲田キャンパスの教室に集まった各グループのメンバーたちは、意見が対立してなかなか折り合えなかったり、振り出しに戻って再スタートしたり、毎回2時間のワークショップが終わるころには燃焼しつくした様子。それでも、時間を延長して議論を続け、別の日にはオンラインでも互いの気持ちを伝え合って提言をまとめあげた。

早稲田大学
プロフェッショナルズ・ワークショップ

企業や社会が抱える課題の解決策を、学生チームが連携先の企業に直接提案する課題解決型のワークショップ。プロフェッショナルズ（企業人）の指導や監修のもと、学部・学年を超えて集う学生同士がグループワークでの議論を通して考える。

※2024年度より「企業連携ワークショップ」に名称変更

ニュース・リテラシー

正確で信頼できるニュースを見分け、正しく読み解く力のこと。インターネットとソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の普及で、だれもが簡単に情報を発信することが可能になり、偏った情報や極端な意見が出回ったり、フェイクニュースが拡散したりといったことが問題になっている。

読売新聞社では、子どもたちにニュース・リテラシーを身につけてもらうため、小中学校でモデル授業を試み、教室で活用できる教材の開発を進めている。プロプロでは2022年度に「ニュース・リテラシーを広めるには？」のテーマで提言を求め、23年度は高校生を対象に絞って具体的な授業のアイデアを出してもらった。

ワークショップでは、読売新聞教育ネットワークの田中孝宏アドバイザーがニュース・リテラシーの重要性や、注目されるようになった背景などについて解説。取材と記事執筆を体験してもらうための模擬記者会見も行われた。

模擬会見で学生からの質問を受けたのは、同ネットワークの渡辺嘉久記者。社会部、政治部の記者や編集委員などを務め、現在はニュース・リテラシーや若者の政治参加などについての出前授業を行っている。渡辺記者は「新聞記者の仕事が面白いのは、取材を通じて自分の固定観念が覆されること」「自分が発信した情報が、どれだけ一般の読者の共感を得られるかに絶えず気を配る必要がある」「入手したデータを信用していいか、自分の解釈が正しいのかを常に考えることも重要」などと質問に答えながら説明した。「次は、これを質問しなきゃ」と学生に促す場面もあり、模擬会見ながら学生たちは真剣勝負の緊張感を味わった。

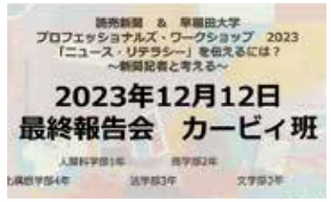
学生が書いた記事は、渡辺記者がプロフェッショナルの視点から細かく添削して、学生に返した。

最終報告会

12月の最終報告会は、東京・大手町の読売新聞東京本社で行われた。3チームは早稲田大学の根本進・教務部事務部長、荻原里砂・教務部教育連携課長、読売新聞東京本社の新庄秀規・教育ネットワーク事務局長、田中孝宏・同ネットワークアドバイザーらを前に、提言を発表した。

カービィ班

火災を例に情報の伝わり方を新聞とSNSで比較。SNSでバズる（注目を集める）ような表現を使った投稿記事と、新聞記事のテンプレートをもとにした記事を高校生に書いてもらい、違いを体感してもらう。



シェルズ班

ある社会問題について、いろいろな情報提供者から記者が取材する過程を演劇にして高校生に見せる。どの情報源が信頼できるかを見極め、ニュースの価値、報道のプロセスなどを考えてもらう。

熊の会

キャラクターと主役（自分）との会話によってストーリーが進行するゲームを体験しながら、ファクトチェックの手順を学ぶ。虚報や誤報、ミスリードの可能性がある情報に惑わされないようにする。

早稲田大学×読売新聞 プロフェッショナルズ・ワークショップ

学生座談会

プロプロを振り返って

私たちの考える「ニュース・リテラシー」

小熊大地 さん（政治経済学部4年）
郭　天月 さん（政治経済学部4年）
井口　瞳 さん（人間科学部2年）

田中庸子 さん（早稲田大学教育連携課）
聞き手・石橋大祐（読売新聞教育ネットワーク事務局）

ワークショップを振り返ってみて、いかがですか？

井口 瞳　12月10日の最終報告会で、私がコメントするときに感極まって涙が出てしまいました。達成感と、悔しいような気持ちで……。自分たちのチームの内容は、かなり頑張って力作だと思っていたんですが、他のチームがすばらしくて、自分たちのものがきちんと受け入れられるだろうかと思って、悔しかったんです。

郭 天月　報告会の直後に就職活動が始まって、ケース面接（※）もありました。出された課題について現状を分析したり、足りないものを補ったりしながら提案を行うときや、グループディスカッションの中でどうやって他の人とコミュニケーションをとるのかといったところでワークショップの経験が生かせたなと思いました。

小熊大地　僕の場合は、最終報告会の1週間前ぐらいにチームで発表する内容を変えるかどうかという重要な局面があったんです。チーム内でも意見が割れて、その時の話し合いが印象に残っています。もう一つは、ワークショップが終わってから考えたことですが、報告案をチームで作るということに意識が行き過ぎてしまった、もっと周囲に頼ればよかったということです。読売新聞の皆さんも早稲田大学の職員の方々も、いつでも質問を受けてアドバイスしてくれていました。それに、ここ早稲田大学じゃないですか。ジャーナリズム専攻の先生がたくさんいて、話を聞きに行こうと思えば行けた環境ですし、高校生にニュース・リテラシーを伝えるということで言えば、附属校、系属校などもあって、アンケートしてデータを集めるとか、自分たちだけで考えるのではなくて、もっと周りの意見を参考にするっていう視点が必要だったかなと感じています。

田中庸子　そう言われると、なるほどそういう方法があったかと思いますよね。

※ケース面接＝仕事上の各場面を設定して、自分なりの対応策、解決策を考えさせるような面接

井口さん

今考えて、ニュース・リテラシーとは何だと思いますか？

井口　あらためて聞かれると、やはり難しいなって感じます。私たちの世代は新聞はあまり読んでいないし、私もスポーツ新聞のサークルに入っているので、読むとしてもスポーツの記事が多かったりして、ニュースの定義がよくわからない。

郭さん

郭　就活で、どんな業界に行くのか、どの企業がいいのかを考えるときには新聞は必ず役に立つ面はあると思います。私の場合は、新聞は読んでいるんですけれど、紙の新聞から読むことはあまりなくて、メディアによる有料のネット配信ニュースのアカウントをフォローしています。けれども、毎日必ずニュースを見るということはない。ただ、例えば円安の問題にしても一つの情報だけでは理解できない部分があるので、いろいろなメディアを使って理解することがニュース・リテラシーなのかなと思います。

小熊　難しいですよね、一言で言い切るのも短絡的な感じがして……。ニュースを自分ごととしてとらえるというか、そういう視点を持つことが重要なのかなというふうには思います。

小熊さん

読売新聞が皆さんにお願いしたのは高校生にわかりやすく伝えてほしいということでした。その辺りはどうですか？

井口　最終報告に盛り込む内容としては、インタラクティブゲーム形式や演劇のような形で、高校生に実際に体験してもらう形で理解してもらうのがいいのかな、という意見が多かったと思います。でも、大学生になってから思うんですけど、高校生も大学生もそんなに変わらないんじゃないかなと……。

―― 井口さんはワークショップのときは1年生ですよね。

井口　そうか、大学生活で変わるかもしれないですね。

郭　変わると思いますよ。私の場合は就活ですごく成長したと思います。同じ映画を見ても大人の視点で見ることができるようになりました。他の視点で考えると新たなアイデアが出るとか。

小熊　やはり就活で、ニュースや世の中を見る目が変わったということはあります。それに、大学で学んだことと関連するようなニュースがあると、より理解できたり、授業で聞いたことが現実社会ではこうして起きているんだとわかったりというところはあるかなと思います。僕は政治や経済を学んでいるんですが、例えば政策形成に関して言うと、デジ

タル庁が進めている政策は情報通信政策の授業で言われていた局面に関係しているんだなとか、いろいろ議論されていることが分かることによって、より興味が持てたり、より解像度が高まったりするのかなと思います。

井口　私は授業内容とニュースが関連すると思ったことがあまりないんですよね。心理学や医療を専攻しているんですが、ビッグデータで情報を得ているので……。ニュースを活用する力は、高校生のときの方があったかもしれません。受験勉強で時事問題とか政治的なことなどを勉強していたので。でも、大学に入ってからはニュースとの接点が薄れたという感じです。

田中　心理とか医療についてのニュースをいろいろなメディアから得るということはこれからですね。

専門領域に入っていくことによって世間から離れていくような状態にあるということですかね。なぜニュース・リテラシーのワークショップに参加してみたいと思ったんですか？

井口　メディアに関係する仕事に就きたいと思っていて、読売新聞とのワークショップと聞いて、うん、これはやるしかないと思いました。

田中　メディア関連企業とのワークショップはほかにもあるけれども、読売新聞にしたのは？

井口　実家の隣が読売新聞の販売店（YC）で、自宅にはいつも読売新聞がありました。ちょっとした縁かもしれないなと思って参加しました。

井口さんはスポーツ新聞のサークルに入っているということですが、ワークショップでプロの記者の話を聞いて、取材活動で変わったことはありますか？

田中　模擬記者会見で最初の方で手を挙げていたのが印象的でした。

井口　渡辺記者から、読者が何を聞きたいかを意識することが大事という話を聞いて、試合内容だけじゃなくて、人間性とか、精神面とかの話を取材するようになりました。試合結果だけじゃなくて内容にもこだわるというか、今は速く結果を知らせるような記事が増えているんですが、それだけだったら他のメディアと変わらないですよね。大学生らしいスポーツ新聞を届けたいと思っていて、同じ大学生だからこそ聞ける内容があると思うし、ワークショップに参加する前は単にインタビューしに行けばいいと思っていたところが少しあったんですけれど、今はワークショップで聞いた話を意識しながら取材しています。

就活を経た今だったら、高校生たちにニュース・リテラシーをこのように伝えていけるのではと思うことはありますか？

郭　ニュースと情報の違いについてかなと思います。SNSの情報はエモーショナルに書かれていることが多くて、例えば就活で落ち込んでいるときに見るとさらに悪い方に向かうような、引きずられる感じがするんですけど、ニュースは中立的なものが多いので、読むことで正しい判断ができるということがあります。それに、高校生のときは大学進学のために新聞を読む。でも大学生になると、いろいろな人がそれぞれ違う将来に向かって進んでいるので、どれが正しい道かは言えないというところでニュースが絶対必要だと思う。いろいろな選択肢から自分が何かを選ぶためにはニュースを知ることが必要だと、早めに高校生にもわかってもらいたいと思います。

田中　高校生だと、やはり大学に行くという大きな道が一本あるのが一般的だけれども、大学生は就職するか、就職するとしたらどの会社を選ぶか、または起業する、大学院に進学するといった選択肢をニュースから考えられるということですね。

就活のときに落ち込んだというのは、SNSのどんな情報だったんですか？

郭　まだ内定を取っていないという話も、内定を取りましたという話も、どちらも結構気持ちが引きずられてしまうことが多いですね。私も就活が終わってから発信を始めて、絶対に役立つようなことや、みんな頑張れみたいなポジティブな情報を出しています。

小熊　就活や受験に関して真偽不明な情報があふれていて、それで一喜一憂してしまう。そこから離れたいなという気持ちはすごくあります。

一番高校生に近い立場として、井口さんは高校生とSNSの付き合い方についてどう思いますか？

井口　高校生のときはX（旧ツイッター）を使っていたんですけど、トラブルに巻き込まれてしまったことがあるんです。私はアカウントを消したつもりだったのに、それが乗っ取られて勝手に発信されていたことを同級生に指摘されてわかりました。SNSトラブルは高校生の間でも多くあったので取り扱いが大事だと思います。高校生になると、それまでより自分で判断することが多くなると思うんですが、おかしいなって思ったら周りに相談したり、話し合ったりすることが必要かなと思います。

田中　大学生になって関心が広がったとか、学びが深まったとか、そうした部分で高校生に伝えることはありますか？

小熊　高校生のときは広い世界があることをあまり知らなかった。自分の人生と世界がどうかかわってくるのかについても、あまりわかっていなかった。大学に入って授業を取ったり、こういう活動に参加して他の人の考えや情報に触れたりすることで興味も広がってくると思うので、広く世界を見る努力をしてみたらいいんじゃないかと思います。

田中　次の一歩を踏み出してみようとか、このワークショップに参加してみようとか、新しい世界に触れようとしたきっかけは何だったんですか？

小熊　大学でサークルに入って人との出会いがあったり、必修授業を受けたりする中で視野や考えの幅が広がっていったということはありますね。ジャーナリズムが面白いなと思って授業を取っていたんですけれど、その知識を生かせることに挑戦してみたいという気持ちがあったのと、まったく知らない人とチームを組んで何か新しいことをやるような経験をしてみたかったっていう理由でワークショップに応募しました。

田中さんは学生の皆さんを見ていて、ワークショップの前後でどんなところが変わったと思いますか？

田中　自分の気持ちを伝えたり、相手に質問したりといった言葉にする力がめざましくアップしましたよね。ここは話してもいい場所なんだということが担保されていたこともあったと思うんですけれども、つらいところも大変だったことも含めて言葉にできる。そこに感動を覚えますね。

―― それについては皆さん、どうですか。

小熊　いや、自分ではそんなに成長していたのか、わからなかったんですが、そう言っていただけるっていうことは、そうなのかな。

郭　途中で自分のチームを離れて同じような悩みを抱えている人同士で話し合う回がありましたよね。そこで自分のチームの中での悩みをちゃんと言語にして、相手からもちゃんとフィードバックをもらうことがすごく重要だったと感じます。小熊さんは報告案をチームで作ることにすごく情熱をかけたと話していましたけれども、私は逆に最終の成果物をきちんと出したいという気持ちが強くて、チームの中で協力することをあまり重視していなかったというところをすごく反省しています。プロジェクトが終わってからみんなすごく仲良くなったんですけれど、途中では成果を出したい、成果を出したいと思っていたんですよ。

田中　そうかあ、そこのバランスは確かに難しいね。お互いの距離が近づかないとチームとして動かないし、近づきすぎても、ナアナアになって、まあいいかってなってしまう部分もあるかもしれないし、チームを作るのが難しいのは外で見てても分かる。それを放棄せずに2か月間頑張って、走り切ったのは本当にすごいなって思います。

コロナ禍を経てリアルで議論する機会が戻ってきたわけですけれども、コミュニケーションをとるという意味では、コロナ以前と比べてどうでしょうか？

井口　私は議論とかグループワークが好きだったし、小学校のときからグループワークが結構盛んな環境にいたので、リアルでの話し合いが増えることについての不安はなかったですね。オンラインより実際に会って話し合った方が議論が進みます。今回もZoomで遅い時間に議論したときに寝落ちしたこともあって、それで貢献できていないと感じてしまうこともありました。起きたらZoomが終わっていて……。実際に話し合うことの重要性が再確認されたというか、オンラインが発達してきたからこそ、逆にリアルの方がいいなといった感じになっていると思います。

小熊　僕も対面で集まる方が議論は進むと思っています。ノンバーバル（非言語）っていうか、例えば相手のちょっとした表情だったりとか、しぐさだったりとかから相手の思っていることとか、本音みたいなところが分かることがあるじゃないですか。オンラインだとそこがわからないので、どこまで踏み込んでいいのか遠慮して議論が停滞するところがあると思う。だから、対面で集まって、いろいろ話し合いができたっていうのはすごくいい経験だったなと思います。

郭　オンラインのミーティングだと、責任を逃れてしまう、発言しなくてもいいんじゃないみたいな気持ちになるし、それで静かな雰囲気になるのがすごく気まずいと思うことがありますね。オンラインの方が相手にフィードバックをしにくいとか、誤解を招いてネガティブな感情を引き起こしてしまうことがあるので、対面できちんと伝えることがすごく大事だと思います。私の言葉が足りないときも手ぶりで説明することもできますから。

ワークショップの成果を今後に生かしていけるとしたら、この部分かなっていうのを聞かせてもらえますか？

井口　大学生活で、いろいろなことをしていきたいと思っていて、最近はビジコン（※）に参加しました。その中でもチームで議論するものがあって、答えのない問題について深く考えることが必要でした。大学で今後いろんな活動をするうえでもすごく大事なことですし、言語化する力っていう話があったと思うんですけど、その能力が上がったとしたら、就活でも使っていけたらなと思っています。

郭　個人的な部分と仕事の面で分けて説明したいんですけれど、個人的にはオープンで謙虚にいきたいなと思っています。自分が困ったときにはちゃんと他人の知恵を借りるとか、そのために努力するとか、他の人が困っていれば、それを理解して自分が何か状況を改善しようと努力したいなと思います。仕事の面では、例えば取材のときには相手の立場に立って物事を考えて、正しい質問をするということを聞きましたが、私の将来の仕事でも、お客さんと接するときに相手のニーズをしっかり受け止めたうえで、きちんとお返しすることをワークショップである程度学んだので、それを将来に生かしたいなと思っています。

小熊　僕は三つあるかなと思っています。まず一つは、すでにお話ししたことなんですけれど、いろいろな人を頼るというか、自分たちだけの意見にこり固まるんじゃなくて、もっと広く他人の意見を取り入れたり、情報を取りに行ったりすることを意識していきたいということです。二つ目は、ワークショップの中で意見が対立してしまった経験があったので、チームのメンバーや顧客の合意を取っていくことについてはこれから勉強していきたいなと思っています。最後は、自分から情報を取りに行くという姿勢を大事にして、受動的に情報を得るだけじゃなくて自分から聞き取りを行うというところを大事にしていきたいと思います。

（2024年4月26日）
早稲田大学7号館305教室

※ビジコン＝ビジネスコンテスト、ビジネスプランコンテストの略。ビジネスのアイデア、企画などを募り、様々な観点から評価するコンテスト

※学部・学年は2024年度

井口 瞳
人間科学部2年

想像超えた達成感

普段は関わることができないであろうプロフェッショナルの方々と同じ時間を共有し、かつさまざまなことを教えていただくことができ、良い経験になりました。また、答えのない問題に挑戦していくことがこんなにも大変なのかということも学ぶことができました。やり切った時の達成感は、ワークショップが始まった当初には、想像がつかないほどのものでした。答えのない問題に挑戦していくことは、先の読めない現代社会において非常に大切だと思います。この経験を生かして、自分の頭で考えて、現代社会を生き抜いていく人材になりたいと思います。

郭 天月
政治経済学部4年

資料作成、発表で鍛えられた

今回のプロプロに参加しようと思ったのは、留学生ならではの視点で高校生にニュース・リテラシーを知ってもらいたいという思いからでした。私たちは日々たくさんの情報に触れているのに、情報にどう接するかについての教育はあまり受けていません。例えば、情報とニュースを見分けることができなくて、誤った情報を信じてしまったり、偏見やバイアスが生じてしまったりすることがあります。プロプロに参加して、私のグループではニュース・リテラシーを高校生が気軽に体験できるようなロールプレイングゲームを作りました。作成するプロセスでも、チームメンバーたちと議論して新しい視点やアイデアにたくさん触れました。読売新聞社の方々からも、第三者の目線で改善策や意見をたくさん出していただきました。資料作成や発表などで、自分も鍛えられたと思います。

幸松 豊拓
先進理工学部3年

一人では得られない経験

このワークショップでは、実際にインタビューを行う模擬記者会見から、チームで行うプレゼンまで、幅広い体験と魅力的な経験を積むことができました。ニュース・リテラシーという言葉の背景に、どのような意味が隠されているのかを深掘りしました。私はこの過程で、様々なバックグラウンドを持つ人の考えや意見、個性などを目の当たりにしました。「三人寄れば文殊の知恵」ということわざがあるように、一人では得ることのできない貴重な経験と魅力的な体験がこのプロプロにはあります。情報量の多い現代においてニュース・リテラシーを考えることは必要不可欠です。参加させていただきありがとうございました。

小熊 大地
政治経済学部4年

発見と後悔から得た学び

授業でメディアやジャーナリズムに関して学び、興味を持っていたことからプロプロに参加した。難しかった点が2点あった。1点目は答えのない課題に取り組む難しさ。まだまだ発展途上であるニュース・リテラシーという分野をどのように教育に組み込んでいくかという答えのない課題に頭を悩ませた。2点目はプロジェクト管理の難しさ。決められた期間の中でやるべきことを明確にし、様々な人とコミュニケーションをとりながらチームで成果物の完成を目指すのは一筋縄ではいかなかった。振り返ると様々な発見や後悔があったように思う。それら全てを含めて多くの学びを得た。このような貴重な機会を用意していただいた読売新聞社様、並びに大学職員の皆様、本当にありがとうございました。

小林 顕太郎
商学部3年

視野を広げる経験

読売新聞とのワークショップを終えて思うのは、プロフェッショナルとは一つのことを徹底的に突き詰めているということだ。渡辺記者が「新聞記者は記事の題材を24時間365日考える」という話をされたが、今回関わった読売新聞社の方々は「ニュース・リテラシーについて24時間365日考えている」ように感じた。だからこそ確固とした軸があり、自信をもって明確な話し方ができるのだと思った。それを見習い、自分たちもニュース・リテラシーというテーマに対して深い議論をした。同じ趣味、嗜好で集まるサークルなどとは違い、様々なバックグラウンドを持った仲間との議論は、それぞれの着眼点や思考法が異なり興味深かった。自分の視野を広げることができ、非常にいい経験になった。

西田 里奈
文化構想学部卒業

試行錯誤しながら「伝える」経験

将来の目標と照らし合わせ、「正確で信頼できる情報を読みとく力」と「伝える力」を成長させるため、応募した。今まで「自分は誤った情報に踊らされることはない」と謎の自信を持っていたが、いざ読売新聞の方々からお話を聞くと、様々なバイアスを持って日々情報に接していることに気付かされた。ワークショップでは、取材体験から記事の作成、グループワーク、最終発表に至るまで、試行錯誤しながら自分の考えを「伝える」経験をした。常に最前線で世の中に情報を伝えている方々から、アドバイスやフィードバックをいただくことができ、とても充実した学びある時間を過ごせた。この貴重な経験を忘れず、これからも目標に向かって努力していきたい。

竹内 恵麻
国際教養学部2年

様々な媒体のニュース吸収したい

プロフェッショナルズ・ワークショップを終えて、ニュース・リテラシー自体が何を指すのかを理解することが難しいと感じました。特に、X（旧ツイッター）などのSNSが急速に普及している現代では、どこまでをニュース・リテラシーと呼んでいいのか、その線引きに苦戦しました。しかしながら、このワークショップを通じて、ニュースの真偽を見極め、信頼できる情報源を選ぶ能力の重要性についてすべて理解することはできなくとも、読売新聞の社員の方々によるアドバイスのもと、模擬記者会見を体験し、チームでニュース・リテラシーについて考えることができたのは非常に有意義でした。この機会がなければ、ニュース・リテラシーについて真剣に考えることはなかったと思います。これ以降講義やグループワークはありませんが、自分なりにニュース・リテラシーの理解を深めるためにも、様々な媒体のニュースを読んで吸収していきたいです。

湯浅 咲
社会科学部3年

垣根超えたグループワークで刺激

今回のプロフェッショナルズ・ワークショップを通して私は、ニュースについて深く知ることができました。読売新聞社の方々と直接一緒に活動できるという貴重な環境で、模擬記者会見を行ったり実際にニュース原稿を考えたりし、ニュースをより身近に感じることができたと思います。また、学部学年を超えた学生とのグループワークを通して、自分に足りない点や他の学生のスキルの高さを知り、とても刺激を受けました。今回の貴重な体験を無駄にはせず、これから最大限生かしていきたいです。

メンバーから学んで成長

2年

プロフェッショナルズ・ワークショップに参加して本当によかったと思っています。以前から新聞を読むことが好きだったので、今回のワークショップでニュース・リテラシーについて考えたり、実際に新聞記者の方にお話を聞いたりして、私にとってとても貴重な経験をすることができました。また、グループのメンバーと白熱した論議を交わすことができたのも、とても楽しかったです。このワークショップを通して新しい仲間に出会うことができて、毎回刺激をもらっていました。メンバーから学ぶことも多くあり、自分の成長につながったと思います。大学1年生の1年間に、このワークショップに参加できてよかったです。

考え抜いた2か月間

畑田 啓輔
法学部4年

私たちのチームは既存のニュース・リテラシー教育は現在のSNS時代には適合しないと考え、新たな教育の提言を試みた。この2か月間の挑戦は刺激的だった。常識を疑うことは、様々な意見にさらされることを覚悟しなければならない。実際、読売新聞の方々から飛んでくる意見や質問に答えるのは非常に難しいものであった。しかし、これに答えられないようでは新たな教育の提言はできない。私たちは日々苦しみながらもリサーチや議論を重ね、この難題に立ち向かった。どこまで穴のない提言にできたかは分からないが、この2か月間、私たちのチームがニュース・リテラシー教育を一番考え抜いたと自信をもって言える。

挑戦する活力に

矢ケ部 晃子
文学部4年

具体的なロードマップがない状況で、限られた期間内に大きな問いへの答えを見つけるのは容易ではなかった。ニュースを取り巻く状況が激しく移り変わり、ニュースの顔をした情報も溢れている状況の中、チーム内で共通認識を一つ一つ固めていくことは、最も肝要でありながら最も難しかった。しかし、密なコミュニケーションによって一体感が生まれたことで、皆最後まであきらめず意欲的に取り組むことが出来たと感じる。ひとりひとりが耳を傾けてもらえて意見を尊重してもらえる空気作りこそ、チーム一丸となって失敗を恐れず挑戦する活力につながるのだと学んだ。

さらなる学びへ そして社会へ

荻原 里砂　教育連携課課長

今回のテーマは、《「ニュース・リテラシー」を伝えるには?》ということで、高校生を対象とした授業で何をどう伝えることが効果的かを提案しました。その過程においては、「ニュース」とは何か、新聞記事とSNS投稿の違いは何か、ニュース・リテラシーの有無で何が変わるかを熟考しました。また、今回のターゲットである「高校生」は何に関心をもつのか、自分はどうだったか、それは一般的にも当てはまることなのか、自分たちの考えた授業を通してどうなってほしいのか等々、あらゆる切り口で考えました。そして、時に読売新聞社の方も交えて熱い議論を交わし、アイデアが浮かんでは消えてを繰り返し、ようやく一つの提案にたどり着きました。今回参加した皆さんは、この2か月間で数えきれないほどの学びと経験を重ね最終提案までこぎつけたこと、そして間違いなく成長したご自身をどうぞ誇りに思ってください。そして、今回の提案で何がうまくいったのか、それはなぜか、何がうまくいかなかったのか、それはなぜか、再び頭をフル回転して振り返り、その結果を次の機会につなげてください。その繰り返しこそが、皆さんが憧れた読売新聞社のプロフェッショナルズの皆さんに近づくための唯一の道だと考えています。残る早稲田大学での在学期間で、思う存分さらなる学びと経験を深めてください。

仕事や社会に対し情熱を持ち真摯に向き合う大人たちとの交流を通じ、学生たちが社会へ出ることの期待と希望をもつこと、また自分もその一員となるべく本学でさらなる成長を遂げることが本ワークショップの目的でもあり、今回も十分に達し得ました。読売新聞社の皆さまには今回も惜しみないご尽力をいただきましたこと、心より御礼申し上げます。

経験を今後に生かして

押山 聡子

学部学年が異なるメンバーでのチーム協働は想像以上に大変だったと思います。良い提案をしようとするほど、葛藤も多かったのではないでしょうか。しかし、その中でもメンバーで役割分担し、意見をぶつけ合いながらもお互いを尊重し、最後まで粘り強くこのプロフェッショナルズ・ワークショップに向き合ってくれたことに感謝します。

この2か月間に培った経験をぜひ今後の学生生活や社会人生活に生かしてほしいと思います。皆さんの今後の活躍を楽しみにしています。

見えた意志の強さ

小川 祥子

学生の皆さんは、何かを作り上げるときに支えとなる“正解”がない難しさを、嫌というほど感じたのではないでしょうか。

その難しさを乗り越えようともがく姿に、ただでは折れない意志の強さが見えました。ワークショップが終わっても、ニュース・リテラシーは、みなさんの日常に大きく関わるトピックであることに変わりはありません。今後も、ニュース・リテラシーについて考え続けてほしいなと思います。

伝える力問われたワークショップ

中島 裕衣

皆さん2か月間本当にお疲れ様でした。ニュース・リテラシーは“自身の理解する力”も問われる難しいテーマでしたが、前提知識や過ごす環境が違う“相手（高校生）に理解してもらうための力”＝伝える力がより問われるワークショップだったと思います。この力は社会に出ても役立つと思いますので、今回の経験が皆さんの糧になるとうれしいです。読売新聞社の皆様、このような貴重な機会をご提供いただき、誠にありがとうございました。

走り切って見えた景色

田中 庸子

約2か月間、本当にお疲れさまでした。正解のないテーマに対して、全速力かつ真摯に考え抜いた皆さんを大学職員として心から誇りに思います。ワークショップが終わった今、やりきったという充実感だけではなく、もしかするともっとできたのでは、などの思いも去来したかもしれませんが、それは走り切ったからこそ見えた景色です。一人ではなしえなかったこのワークショップの経験が皆さんの次の一歩となることを願っています。

答えのない課題から

読売新聞教育ネットワークアドバイザー　**田中 孝宏**

「ニュース・リテラシーをわかりやすく、高校生に教えるにはどうしたらよいでしょう」

今回のプロフェッショナルズ・ワークショップで学生の皆さんに与えられた課題だ。

課題は、突然前触れもなくわたしたちの前に現れる。否応なくわたしたちは、その課題に立ち向かわなければならない。社会の中で生きるとは、その繰り返しである。しかも、受験問題集と違って、その課題に正解はない。

今回の課題も同じだ。課題から何を問題として取り上げればいいのか。問題をどうやって考えればいいのか。最後にどうまとめればいいのか。

「ニュース・リテラシーとは」「高校生がわかるとは」「どんな指導法があるか」など、様々な意見や価値観が、話し合うたびに錯綜して、何度も暗礁に乗り上げたことだろう。そして、まとめた発表内容もまだ満足のいくものではなかったはずだ。

答えのない課題解決は、おおよそ同じような結果となる。それでも、期限までにできる限りの成果を必ず示さなければならないのが、社会だ。そんな社会に出てから必要になる問題解決の体験を、このプロジェクトを通して学べたことだろう。

答えのない課題を解決する学習の方法を社会の中で生かし、正解ではない納得解を積み重ねて、より良い人生を歩んでほしいと願っている。

勉強とアウトプットの同時作業

読売新聞教育ネットワーク事務局長　**新庄秀規**

「ああ、これは新聞記者と同じだな」。みなさんの発表を聞いて、まず頭に浮かんだ感想です。

今回のワークショップは、柱が二つありました。一つは「ニュース・リテラシー」について学ぶ。もう一つは高校生用の教材を作ることです。前者ですら大変なのに、それをしっかり理解し、かみ砕いて伝えなければならないという難行です。ただ、これは二つの作業でありながら、それぞれが密接に結びついています。そして、これこそが記者が日々行っている仕事なのです。

社会のあらゆるニュースに対応するため、新聞社にはたくさんの専門記者がいますが、彼らが初めから何でも知っていたわけではありません。何の知識も持たないまま取材をしなくてはいけない場面も多々あります。勉強不足を取材相手から怒られたり、記者会見の場で見当違いな質問を繰り返したり……。他人（しかも、その分野の知識のない人たち）に伝えるために、自身も勉強する。記者は日々、勉強とアウトプットを同時並行で行っているのです。

みなさんは、発表時に、私たちから厳しい指摘を受けました。これも、記者が原稿を出したときに、デスクから受ける指導に似ています。「ニュース・リテラシーの教材作り」という題材の中で、ニュース現場と同じようなことが行われる。劇中劇を見ているような感覚を覚えました。

今回の取り組みが、みなさんの糧になりましたら、この上ない幸せです。

What's News Literacy? 2023

早稲田大学×読売新聞　プロフェッショナルズ・ワークショップ

2024年8月発行

【発行】

読売新聞教育ネットワーク事務局

【編集・製作】

新庄秀規　渡辺嘉久　鈴木美潮　多田貫司　石橋大祐　田中孝宏　橋本弘道

〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 読売新聞東京本社

TEL:03-3217-1967　FAX:03-3217-1968　MAIL:ednet@yomiuri.com

読売新聞 教育ネットワーク YOMIURI EDUCATION NETWORK